



127
2023春

にってん フォーラム

高田馬場^{いち にーさん しっ!}1-23-4 ————— 長岡英司

2023 年度の事業について ————— 立花明彦

発見された幻の点字図書館設計図 ————— 伊藤宣真

花島弘理事逝去のお知らせ

日本ライトハウス創業 100 周年

～二つの大きな事業の柱 ————— 日比野清

創立 40 周年！六つ星山の会のご紹介 ————— 清水重人

河辺豊子さんが作った道

(河辺豊子さんを偲ぶ) ————— 星川安之

川崎市視覚障害者情報文化センターだより

————— 庄司尚子

にってんワークショップ開催報告

ふれる博物館ワークショップ

「小さな石から」開催 ————— 伊藤宣真

私と日点 ————— 東野径子

明日につながる支援の力

リレーエッセイ ————— 蕪木克行

ご存じですか？こんな商品

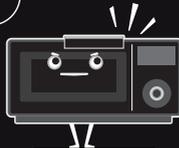
チャリティコンサートのご案内



らく楽アシスト

音声で、
あなたをアシスト。

あたため
がんばります。



レンジグリル

18時30分に
炊き上がります。



ジャー炊飯器

調理中はそばを
離れないでください。



IHクッキングヒーター

あふろの煙は
しましたか？



エコキュート



https://twitter.com/ME_RakuRaku



らく楽アシスト

検索

www.MitsubishiElectric.co.jp/sq/assist/rakuraku/



三菱電機株式会社

〒100-8310 東京都千代田区丸の内2丁目7番3号 (東京ビル)

●三菱電機お客さま相談センター 家電品の購入相談・取扱い方法

フリーダイヤル 1120-139-365 (無料)
いつでもセンター 365日

携帯電話・PHSの場合
TEL 0570-077-365 (有料)

FAX 0570-088-365 (有料)

フリーダイヤル・ナビダイヤルをお使いいただけない場合は
TEL 03-3414-9655 FAX 03-3413-4049 (有料)

■ご相談対応 平日 9:00 ~ 19:00 左記以外の時間は
土・日・祝・弊社休日 9:00 ~ 17:00 受付のみ可能です。

*電話番号は変更になる場合がございますので、あらかじめご了承ください。
*電話番号をお確かめのうえ、お間違のないようおかけください。

開発力と製造力の回復を願う

ながおかひでじ
理事長 長岡英司

先日、韓国のITベンチャー企業の開発者が来館されました。自国内だけでなく米国でも高く評価されている「ドットパッド」という自社製品の紹介が目的でした。この製品は、縦横に配列された多数のピンの上げ下げで画像や点字を表示する触覚ディスプレイです。A4版ほどの大きさで厚さ1.6cm、重さ1.2kgのスリムな機器の表側に、縦方向40本×横方向60本、計2400本のピンからなるグラフィカル表示部と、20マスの点字表示部があります。そこに、パーソナルコンピュータとスマートフォンから微弱電波で送られてくる画像や点字が、次々と表示されました。

日本にも以前は国産の点図ディスプレイがありました。2002年に発売された「ドットビュー」です。これは、同じ時期に開発されたドイツ製の「ドット・マトリックス・ディスプレイ」とともに、世界的に他に例のない貴重な製品でした。残念なことに、国産点図ディスプレイの製造はすでに終了しています。

以前の日本は、視覚障害者用情報機器の分野で先駆的でした。例えば、1976年には、国内企業が世界初の拡大読書器「オプティスコープ」を製品化しました。1998年には、最初のデイジー再生機「プレクストーク」を、日本企業が世界に先駆けて発売しました。ところが、状況はその後すっかり変わってしまいました。拡大読書器は今や輸入品ばかりです。操作性に優れ、人気の高かった国産の小型デイジー再生機が、惜しまれながら製造終了になりました。

家電品などと同様、視覚障害者用情報機器も、誰もが使いやすい有用な製品を確実に入手できることが大切です。輸入業者の皆さんは、そのために大いに尽力してくださっています。しかしながら、日本の視覚障害者のニーズや日本社会の特性を踏まえて開発された機器もあってほしいものです。国際情勢が大きく変化しつつある今日、「経済安全保障」や「エネルギー安全保障」という議論が盛んです。視覚障害者が情報社会に参加するための機器が安定的に供給されるよう、「情報アクセシビリティ安全保障」という視点も必要なのではないでしょうか。企業や開発者の元気が戻ってくるような方向への社会の進展に期待します。

2023年度の事業について

たちばなあけひこ
館長 立花明彦

当館の創立者である本間一夫^{ほんまかずお}が視覚障害者のための図書館事業をライフワークにした背景には、好本^{よしもとただす}督、岩橋^{いわはしただけお}武夫、熊谷^{くまがいてつたろう}鉄太郎の3人の視覚障害者の存在がありました。このうち、『道ひとすじ 昭和を生きた盲人たち』（あずさ書店）で「日本盲人の父」と称されている好本督は、『点字毎日』の発刊を毎日新聞社に提案したり、英国の視覚障害福祉事情を日本へ伝えたりして視覚障害福祉の黎明期に数々の影響を与えました。また1940年11月10日に開催された当館の開館式にも列席されています。2023年はその好本没後50年、そして氏から有形無形多くの教えを受けた本間一夫没後20年の年に当たります。好本が伝える英国の事情に刺激されて本間が目指した図書館は、読書を通じての「視覚障害がもたらす不自由からの解放」でした。事業は、一に視覚障害者の読む自由の援助を、次に日常生活での不便さを解消し、生活の質を高める支援へと発展し、今日に至ります。

一つの機関が歴史を刻む過程において何らかの節目を迎えるとき、初心を思い起こす、あるいは原点を振り返り確認することは不可欠であり、それなくしては機関の健全な維持と継続、発展はあり得ません。創立者の没後20年に当たる本年、当館は改めて本間一夫が目指したもの、この図書館に込めた思いを確認し事業を展開して参ります。

近年、多くの自治体や民間機関、企業でSDGsを支持し、達成のための活動がされています。当館としても、その趣旨に賛同するものであり、これを意識した行動を進めたいと思います。同時に、多くの視覚障害者の生活に欠かせない存在となっている当館には、次の時代へ向けて事業を安定的に継続し、さらに発展させる社会的責務があり、日点版のSDGsの策定と行動が求められているとも言えます。2023年度の重点課題として設定した五つの項目は、このことを意識した内容となっています。紙面の都合からここではそのうちの三つをご紹介します。

一つは図書利用登録者増に向けた方策の検討と実践です。

図書利用登録者の増を図る取り組みは従来から行っていますが、その結果はほぼ横ばい状態で、目立った成果を得られていません。当館における視覚障害者数に占める図書館登録者数の割合は、都内在住者を見た場合10%程度で、晴眼者の公共図書館登録率と比べて30ポイント程度低く、低調となっています。利用登録者増の余地はまだ大きく残っており、そこに当館の役割と使命を果たすべく責務が大きくあると言えます。そこで、従来取り組んできた方策について、その実績を元に見直し、利用者に関する各データを分析して新たな方策を導くと同時に、その導入に向けた準備を進めます。

二つ目には、点字図書製作体制の充実を図るべく行動します。

2021年度の蔵書となる点字図書の製作数は162タイトルで、2010年294タイトルの55.1%まで落ち込んでいて、2022年度の実績も前年度と大きく変わらない見込みです。その背景には、点訳者の高齢化に伴う勇退で点訳者が2010年の6割近くまで減少していること、点訳者の養成を見合わせていたこと、さらには点字図書の完成に至る過程での体制上の課題などが挙げられます。図書館には、知を集積し、後世に伝える使命があり、点字図書館である当館にはその知を点字で伝え、同時に点字文化を守り伝える任務があります。この義務を遂行すべく、人員配置を含めた製作体制、使用設備等の課題を洗い出し、その改善方策を見出すためのワーキンググループを発足させ、改善の道筋をつけます。合わせて点訳者養成に向けた体制準備を進めます。

三つ目は広報活動の充実です。

当館の事業は、多くの方々の財政面での支持や支援によって成り立っており、そのために一層のご理解をいただく広報活動は重要で、注力せねばなりません。これについては従来からいろいろに取り組んでいますが、必ずしも統括的に展開してきたとは言い難く改善の余地があります。そこで、広報委員会を設置し、広報活動を統括して活動を効果的に推進させます。また法人が保有する豊富な資料等を広報活動や社会貢献（研究活動への提供など）に有効に活用できるよう見直しと検討を進めていきます。

これらに取り組むと同時に、定常の業務を着実に継続していかなければならないことは言うまでもありません。改めて、当館への変わらぬご指導とご支援をお願い申し上げます。

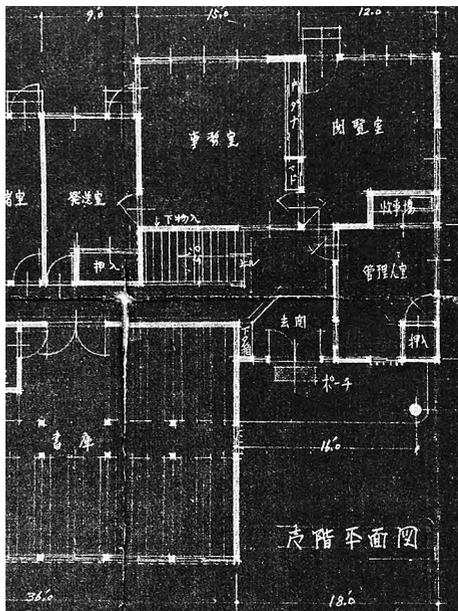
発見された幻の点字図書館設計図

本間一夫記念室 いとうのぶぎね
伊藤宣真

昭和23年春、当館は疎開先の北海道・増毛町から東京復帰を果たしました。創立者・館長の本間一夫は、名称をそれまでの「日本盲人図書館」から「日本点字図書館」に変更し、猛烈なインフレに対抗するための会費制導入、点訳奉仕運動の復活などに取り組みましたが、「さて私にもう一つ、どうしても急がなければならぬ大事業がありました。それは戦災で失った図書館の建物を、もう一度できるだけ早く建てなければならないことでした。」と著書『指と耳で読む』に書いています。当時は、戦争で焼け跡となった敷地に建てた、木造平屋建て15坪（のちに増築し25坪）の本間の住まいと兼用の図書館でした。

本間は建築資金援助の訴えを、ヘレン・ケラー来日キャンペーンで大々的に募金活動を展開した毎日新聞社や、当時の厚生省、GHQにも働きかけましたが、願いはかないませんでした。その苦労話はいろいろなところに書かれておりますが、どのような規模の図書館を考えていたのかは、まったく不明でした。

ところが本間没後20年の今年2月上旬、隣地に住む本間の長男・一明氏かずあきが、整理をしていたら出てきたと何点かの古い資料を持参され、その中に「点字図書館新築工事」と題する大判の青い建築設計図面がありました。設計は大林組東京支店設計部、作成日は昭和23年7月22日とあり、建築計画は復帰後すぐの着手だったことが裏付けられました。図面が納められた封筒には、築地本願寺建設や、その後小田原城天



見つかった建築設計図（部分）

守閣復興を請負った松井建設株式会社の社名印刷があり、施工会社も決まっていたようです。

木造2階建てで、建坪は1階が55.5坪、2階が51.75坪、合計107.25坪。間取りは、1階が書庫、閲覧室、発送室、点訳奉仕者室、事務室、理事室、玄関脇に管理人室、2階に上がる階段下には書庫から入る消毒室。2階には集会室、応接室、研究室、写本室、会議室、印刷室、談話室兼宿泊室、職員宿泊室2室があります。

書庫には、約2.7m幅の書棚が38本と約90cm幅の棚が5本作りつけになっており、棚を6段、点字図書1冊を5cmの厚さとする、約1万3千冊の点字図書の配架が可能と思われます。当時3千冊を超えたばかりの蔵書数であったことを考えると、事業の発展を目指す本間の意気込みが感じられます。

幻に終わった図書館建築でしたが、本間の夢の一部を具体的に示した貴重な資料の発見でした。

花島弘理事逝去のお知らせ

去る3月4日、当館の^{はなしまひろし}花島弘理事が硬膜下血腫のため急逝されました。85歳でした。葬儀は、3月13日に上石神井にあるご自宅近くのお寺において、家族葬で執り行われました。

当館には昭和37年に入職し、平成10年まで36年間勤務されましたが、退職後も亡くなるまで25年間、理事として当館の運営を支えていただきました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

なお、花島理事が果たされた功績については次号でご紹介いたします。

日本ライトハウス創業 100 周年

～二つの大きな事業の柱

社会福祉法人日本ライトハウス 常務理事 ひびのきよし 日比野 清

1922年、岩橋武夫が自宅で、エスペラント学習の手引書の点字印刷を始めから、昨年で100周年を迎えた。岩橋武夫は、その後、英国に留学し修士号を取得、福祉事業も学び帰国しその7年後、大阪阿倍野の地に「会館」の建設を開始し、1935年ライトハウス会館が竣工した（戦後ライトハウスと改名）。点字図書の出版や貸し出し、更生相談と訪問指導など、今日に繋がる諸事業を始めた。戦前・戦後に行われた日本でのヘレン・ケラーによるキャンペーンは、1950年施行の身体障害者福祉法の制定に多大な影響を与えた。1954年に武夫が逝去した後、いわはしひでゆき岩橋英行が理事長となり、盲学校教科書の供給基地として点字出版所を充実させ、点字図書館には声の図書部門を置き、1960年「社会福祉法人日本ライトハウス」と改名し、大阪市鶴見区の新社屋に移転した。

現日本ライトハウスの事業の一つである情報部門は、1979年、大阪市西区に点字図書館を新築、移転（2009年建て替え「情報文化センター」）となった。また、1991年、点字出版所は、東大阪市に「点字情報技術センター」として新築移転した。これらの施設を中心に、視覚障害者の情報環境のバリアフリー化へ向けた先駆的な取り組みを始め、全国の目の見えない方・見えにくい方の「情報・文化・コミュニケーション」の拠点となるよう事業を発展させていきたい。一方、リハビリテーション事業部門は、1965年に「職業・生活訓練センター」として新築し、開所した。その後、歩行訓練指導員養成講習会開催、盲導犬訓練所を設立（現大阪府千早赤阪村に移転）した。現在では、「視覚障害リハビリテーションセンター」を中核に、専門的な訓練を通じて、視覚障害者の自己実現と積極的な社会参加を目指すとともに、必要なサービスや支援の提供を展開している。

創業100周年を契機にこれからも日本ライトハウスは、視覚に障害のある方々の総合福祉施設として、「目の見えない・見えにくい方々の行く手を照らす燈台」としてあかりを灯し続けて行きたい。時にこれは、日頃点訳や朗読に尽力してくださっているボランティアの皆様にとっても、励みにしていただることなのではないでしょうか。

創立40周年！六つ星山の会のご紹介

しみずしげと
自立支援室 清水重人

六つ星山の会は、視覚障害者と健常者がともに登る山の会です。1982年に二人の視覚障害者が、山に連れて行ってほしいと日点を訪れたのが始まりで当時職員だった松本克彦まつもとかつひこさんが山好きのメンバーと共に創立しました。

六つ星という名前の由来は点字だけでなく「六連星」からも来ており、六連星である昴の語源「統ばる（すばる）」が「まとまってひとつになる」という意味であることから六連星のような会でありたいという願いが込められています。

当会では現在月2回程度登山を行なっています。また入会したばかりの視覚障害者やサポート向けの講習登山や会の公式登山とは別に、個人企画の登山も積極的に行なっています。視覚障害会員は、前と後ろ二人のサポートから説明を受けながら前サポートのザックに片手を添えて、ザックの動きから前サポートの登り下りや曲がる等の動きを感じて歩きます。鳥や動物の声、花や木々など自然の音や匂い、手触り、足裏から感じる土や岩の感触、視覚を使わずに感じとれる山からの贈り物を、全身で楽しみます。そして、きつくて険しい道を歩いたという達成感、仲間や山で出会う人達との交流も楽しみにしています。

しかし、サポートの年齢も高齢化し人数も足りないため、やむなく視覚障害会員の参加者数を減らさざるをえない状況が続いています。当会は難易度の低い山にも行きますし、会員はみな優しい方ばかりで初心者の方も安心して入会できます。もし興味がありましたら、本誌読者の皆様にもぜひ一度体験参加して、自然を満喫しながら交流を楽しんでいただけると嬉しい限りです。



河辺豊子さんが作った道（河辺豊子さんを偲ぶ）

公益財団法人共用品推進機構 専務理事 ほしかわやすゆき
星川安之

数年前から間質性肺炎を患っていた全盲の河辺豊子さん（77歳）が、1月31日、亡くなりました。筑波大学附属盲学校の教師であった河辺精孝先生と結婚、二人のお子さんを授かるもご主人は病で若くして逝去、それ以降は鍼灸、日本盲人会連合（日盲連）、日本点字図書館（日点）で働きながら二人を育てあげました。著書『見えなくても・愛』は、彼女の半生を自ら紹介し、浜木綿子さん主演のテレビドラマにもなり、多くの人に「見えないとは？」を正確に伝えました。

私が、河辺さんと出会ったのは40年前、「日点ゲームを楽しむ会」でした。勘のするどい彼女は無類のゲーム好き、2か月に1度のゲーム会に皆勤だけでなく河辺さん宅にみなで集まっては、大笑いしながら楽しいひと時をすごしたものです。大笑いしながらも、彼女は常に「社会が、障害のある人たちにとって住みやすくなること」を、目指していました。日本玩具協会で1990年にはじめた共遊玩具のマークは、盲導犬をデザイン化したらとの彼女の案で実現しました。その後、障害の有無、年齢の高低に関わりなく共に使いやすい製品・サービスを普及する市民団体E&Cプロジェクトではパッケージ班を結成し、紙パック牛乳の上部に半円の切り欠きを付け、他の紙パック飲料と触って識別することを提案し実現、日本産業規格（JIS）や国際規格（IS）にもなりました。

同プロジェクトで行った視覚障害者300名への調査報告書を、多くの人に知ってもらおうと、喜多川桂子さんと共に絵本『朝子さんの一日』を企画、視覚障害者の「朝起きてから夜寝るまでの不便・工夫・便利」を、イラスト入りで紹介、多くの人から「目からウロコが落ちた」と感想が届き、共生社会づくりの仲間が増えていきました。その後の朝子さんの生活は、彼女の手によって書籍『朝子さんの点字ノート』となり、当時、朝日新聞の白井健策さんの心にとまり、天声人語で熱く紹介されました。

河辺さんが多くの人と共に作ってきた道は今、障害のある人たちだけでなく、多くの人が笑顔で歩ける道になっているのです。

川崎市視覚障害者情報文化センターだより

「小説の中の音を楽しむ会」を開催しました

しょうじ なおこ
利用サービスグループ 庄司尚子

当センターは、年2回「読書会」を行っていますが、最近は参加人数が減ってきていました。そこで、今年度は読書会にもう一つの楽しみをプラスし「小説の中の音を楽しむ会」を開催しました。

2023年1月13日（金）、今年度2回目の「小説の中の音を楽しむ会」のテーマ作品は、2016年に本屋大賞を受賞した、みやした なつ宮下奈都著『ひつじ はがね もり羊と鋼の森』です。この作品は、偶然目にしたピアノの調律に魅せられて、調律師を目指す青年の物語です。ピアノを演奏するシーンはたくさん出てきますが、はっきりとした曲目が分かりません。そこで、その場面ではどんな曲が演奏されていたのかということ想像しながら、小説の世界を楽しんでみました。まずは小説をデジタル音源で聴き、そのシーンに演奏されたであろうピアノ曲を、辻井伸行氏などの演奏による音楽CDで聴きます。例えば、主人公のひとりが結婚披露パーティーでピアノを弾く場面。小説では「結婚行進曲」としかありませんが、これはメンデルスゾーンの「結婚行進曲」だったのか、それともワーグナーの「婚礼の合唱」だったのか。パイプオルガンの演奏なども織り交ぜながら、小説と音楽を交互に流します。言葉で紡がれる青年の物語と、それを彩るピアノの音を体感しつつ、小説の世界を更に楽しむことができました。今回はYouTubeによるライブ配信も行い、コロナ禍ということや、寒い季節の外出に不安のある方に対しても、楽しめる会といたしました。

当日は、会場参加16名、オンライン参加6名。通常読書会より多くの方にご参加いただき、積極的に感想を語り合う活発な会となりました。センターの高音質の音響システムでじっくりと音楽を聴くことができ、コンサートのような臨場感のある体験ができたと思います。小説にも興味がわき録音図書再生機の購入手続きをして帰られた方や、紹介した図書を借りていく方もいて、読書へのアプローチとしては大変実りのある会となりました。

日本点字図書館は、指定管理者として、川崎市視覚障害者情報文化センターを運営しています。

にってんワークショップ開催報告

第8回「見えない・見えにくい人」の歩行について

1月のにってんワークショップは「歩行」をテーマに開催しました。前半は「見えない・見えにくい」ってどういうこと？という講義を行い、後半はグループに分かれて3つの体験をしてもらいました。

前半の講義では、見えない・見えにくいことを分かってもらうために、見えるとはどういうことか？目や脳のどの部分を使って見ているのか、どういった基準で見えることを表すのかといったことを説明し、特に、見えづらい状態は人によって様々で、なかなか想像するのが難しかったりするので、どのようなパターンの見えにくさがあるのかを写真や動画を使ってお伝えしました。

後半の体験では、シミュレーションゴーグル（視野狭窄や白濁など見えにくい状態にしたゴーグル）を着けて、文章やタブレットの画面を見てもらうロービジョン体験、白杖を使っての歩行体験、見えない・見えにくい人のガイド（誘導）体験を行いました。

ロービジョン体験では、白濁や視野狭窄といった見えにくさの違いによって、工夫の仕方（拡大や白黒反転）も違ってくることを、小説や漫画を読んだり、迷路を解いてもらったりして実感してもらいました。白杖体験では、白杖にはどういった機能があって、安全を確保するのにどのように使うのか、杖先からの情報をどうやって捉えているのかを話した後、実際に歩いてもらい、ガイド（誘導）体験では、見えない・見えにくい人と一緒に歩くときには、どのような方法でガイドすればよいのかを場面ごとに説明し、二人一組になって実践しました。

参加者は9名。小学生もいてご家族で参加されているグループもありましたし、実際に視覚障害者のガイドをしているかたもいました。小学生からは、「見えない・見えにくい人に会ったら、サポートしてあげたい」という感想も聞かれ、見えない・見えにくい人の困りごとやサポートの方法を知ってもらう大変良い機会になりました。

ふれる博物館ワークショップ「小さな石から」開催

ふれる博物館館長 伊藤宣真

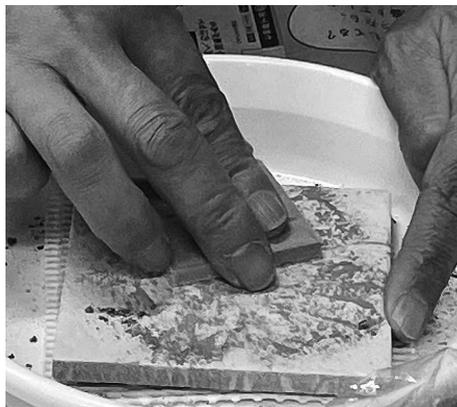
ふれる博物館では今まで企画展に合わせた体験型のワークショップを開催していましたが、2020年以降新型コロナの感染拡大により、開催を見合わせておりました。

しかし今年に入り感染も下火になってきて社会も平常に近づいたので、感染対策を取りながら2月25日土曜日、3年ぶりにワークショップを開催いたしました。共催には、毎回の「手と目でみる教材ライブラリー」の他に、今回は「NPO 法人富士山からはじまる天然顔料と粉碎の研究会」も合わせた開催でした。講師は同会の理事長を務める、日本画家で日展特別会員、女子美術大学名誉教授の橋本弘安先生はしもとこうあん。内容は「小さな石から」と題した岩絵具の製作・作画の体験です。

①小さい粒のラピスラズリ（青い鉱石）を粉碎器に入れて力で潰す、②表面の粗いタイルに挟んで擦り潰す、③糊を加えて表面の滑らかなタイルに挟んで再び擦り潰す、という工程を経て作った岩絵具を、指で紙に作画するという体験です。参加者には潰すときの力の入れ具合、音や振動、紙に塗った絵具のざらざら感などを体感していただきました。

当日2回、それぞれ5人の視覚障害者と付き添いという、計20人の参加でしたが、多くの方が石を擦り潰すという経験がなく、貴重な体験に時間をオーバーして楽しみました。

参加者が自ら作った岩絵具で作画した5cm四方の紙は、橋本先生が「あかがねミュージアム」（愛媛県・新居浜市）で進めている「ほくたち わたしたちの壁プロジェクト」で、市民参加アート作品として展示される予定です。



糊を加えて再度擦り潰し、岩絵具の完成



私と日点

ひがしのみちこ
朗読ボランティア 東野径子

私が朗読という世界に出会ったのは、1980年頃でしたか千葉県柏市の講習会でした。友人に誘われてNHKの元アナウンサーという方の講習を受けました。その途中で夫の転勤、神戸に移りました。そこで神戸市立点字図書館の講習を知り、改めて受講、それから7年ほど神戸で活動していました。

柏に戻ってから、千葉点字図書館、柏市朗読サークルで、また、プライベートでハンセン病療養所全生園の録音図書製作にもしばらく関わりました。

日点には柏のサークルの友人の紹介で2000年からお世話になっています。

初めはスタジオ録音、個人朗読、びぶりお工房が始まってからはそちらにも、また2013年からテキストデイジー図書にも関わらせていただいています。

もともと本は好きですので自分の好みの物はよく読みましたが、朗読という世界に入らせていただいているいろんなジャンルの本、自分では選ばない本など読ませていただき世界が広がりました。

朗読に関わり始めたころはまだオープンリール、録音はスタジオに通ってということ、カセットテープになって自宅録音が出来るようになりました。それがどんどん進歩、今ではパソコンで、ネットを使ってと本当に便利になりました。読ませていただいた本もサピエ図書館などから多くの方々に聞いていただけるようになり、充実した日々を送らせていただいています。

朗読という分野に関わるようになって数十年が経ってしまいました。このような機会に恵まれたこと、私の生活の一部に練り込まれた「声を出して本を読む」ということが日常になっていることに自分でも驚きながら日々楽しんでいます。

日点に関わるようになってから四半世紀ほど経ってしまいました。そろそろ引き際だと思います。これから活躍なさる皆さまも楽しんで本を読んでいただきたいと心から思っています。長い間楽しませていただき有難うございました。

◆ ◆ ◆ 明日につながる支援の力 ◆ ◆ ◆

このコーナーでは、当館をご支援くださっている団体・企業などをご紹介します。(総務部)

Audible Inc.

視覚障害のかたがたにとって録音図書は情報入手のための大切な方法ですが、最近では一般向け(晴眼者向け)にも録音図書が作られ、インターネットで有料配信されています。

大手オーディオコンテンツ制作・配信企業のひとつ Audible Inc. (以下オーディブル Audible) は、一般向けに製作した図書を活字を読むのが難しいかた向けにカナダで無料配信を行っています。その実績をもとに、日本でも同様の事業を行うことを企画され、当館にお話をいただきました。

著作権等の兼ね合いからサピエ図書館のネット配信ではなく、当館が夏冬の長期休み前に行っている録音図書データをメモリーカードに入れる「セレクトパック」の形式で、夏・冬、各20タイトルを目安に昨年度より提供いただくこととなりました。

昨年夏は、女優の杏さん朗読の池井戸潤著『犬にきいてみる』などの20作品。冬は俳優の田辺誠一さん朗読でノーベル文学賞受賞者カズオ・イシグロ著『日の名残り』など18作品を提供いただき、夏は295人、冬は256人の利用がありました。この人数は12年のセレクトパックの歴史の中でベスト5に入る利用数で、利用者の関心の高さを感じます。

Audibleのかたのお話では「作家のイメージしている世界観を朗読で表現する。作家が読み手や読み方を指定することもある。」とのことで、ラジオドラマのような感覚で録音図書を製作しているように思われました。

利用者アンケートでは「良かった」「また聞きたい」との好印象の声が大多数で、今後は時代小説、推理小説や鉄道の図書などを希望する声がありました。

新しいタイプの録音図書を提供いただいている Audible に心から感謝申し上げます。

旬な話題が魅力の録音雑誌たち

かぶらき かつゆき
録音製作課 蕪木克行

当館発行の月刊録音雑誌『にってんデイジーマガジン』や『ブックウェーブ』の編集作業を担当しています。これらの雑誌についてお話ししたいと思います。

『にってんデイジーマガジン』は特に人気が高く、発行日は毎月1日としていて、前月の末にはサピエへコンテンツの登録をするようにしているのですが、月末になると「まだサピエに登録されていないようだけれど、いつになりますか？」などと問い合わせをいただくことがあるほどです。

この雑誌は当館オリジナルの『ホームライフ』、『医学研究』、『ブックウェーブ』や『月刊文藝春秋』などを統合したものです。このうち、『月刊文藝春秋』は、広告も含めた全文を朗読していて、30時間前後となっています。ただ2023年1月号は、創刊100周年記念号で、墨字雑誌は通常500ページあたりなのが、680ページほどに。朗読の収録時間は40時間を超えるボリュームになりました。かつてのテープレコーダーならば全て聞くのも大変ですが、デイジー形式になっていて、見出しジャンプやページ移動ができるので、ストレスなくお読みいただいたことと思います。デジタルの時代、デイジーの存在の大きさを感じます。

『ブックウェーブ』は、いくつかのコーナーからなっており、「人・話題の窓」は、その時々で話題となっている視覚障害者や関連団体などにお話を伺うコーナーです。話題となっている本などをピックアップしてご紹介する「トークエッセイ」、「今月の一冊」、「こんな本ご存知ですか?」というコーナーもあり、タイトルどおり、本に関する情報提供にも力を入れています。サピエ図書館に登録されている雑誌をご紹介する「月刊サピエジャーナル」のコーナーも設けています。ここで取り上げるものは、抜粋の場合もありますが、各施設・団体が独自の視点で記事を選んでいて、興味深いものも多くあります。

録音雑誌はタイムリーな話題を多く扱っている傾向があり、聞いていると思わぬ発見や気付きもあるかと思われれます。そこに人気の秘密があり、利用者には雑誌が重要な情報源になっていると言えます。

ご存知ですか?

こんな商品

わくわく用具ショップより、どなたが使っても便利な新商品をご紹介します。ウェブショップからもお買いものができます。ぜひご利用ください。

お問い合わせ 03-3209-0751

URL <https://yougu.nittento.or.jp/>

ミスフランスのクリップ6個入り

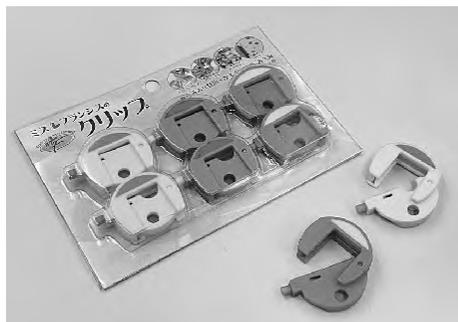
[大きさ] (横) 41 × (縦) 30 × (厚さ) 11mm

[重さ] 約 10g

[材質] POM (ポリオキシメチレン) ※内部のスプリングにはステンレスを使用

[メーカー] 有限会社フランス・インター

[価格] 1,430 円 (税込み)



開封した食品の袋や、においの気になるごみ袋など、袋の口を簡単に止めることができるクリップです。しっかりホールドし、乾燥、湿気、水漏れ、においをシャットアウトします。

直径 3 cm ほどの円に近い形をしています。側面にある突起を押しながら、円を 2 つに割るようにスライドさせると開く仕組みです。ねじった袋の口をクリップで挟むだけで簡単に密閉できます。

クリップを閉じている最中は「カチカチ」という音が鳴り、最後まで閉じ切ると音が鳴らなくなります。それ以上クリップが動かなくなるため、しっかり袋を閉じられていることが感覚的にわかります。

本体にはマグネットと、紐を通せる穴が空いているため、使用しないときはマグネットで冷蔵庫に貼り付けたり、紐を通して吊るしたりすることで保管ができます。

冷凍、冷蔵、湯煎が可能です。壊れにくいよう素材にこだわっており、繰り返し使えるため環境にも優しいです。

「普通袋用 6 個入り」か、「普通袋用 3 個・厚手袋用 3 個入り」をお選びいただけます。

チャリティコンサートのご案内

第21回本間一夫記念日本点字図書館チャリティコンサートを下記の通り開催いたします。ご出演は弦楽四重奏団 HONO Quartet (ほのカルテット) の皆さんとヴァイオラ奏者の澤和樹さんです。

HONO Quartet は2018年、メンバーが東京藝術大学在学中に結成。古典作品を中心に取り組み、東京を拠点に全国でリサイタルを開催しています。始動もなく秋吉台音楽コンクール室内楽部門で優勝するなど演奏技術が高く、特にハイドンの演奏は多くの聴衆を魅了しています。

澤和樹さんは国際的に活躍するヴァイオリニストです。ヴァイオラ奏者としては、2008年にマックス・ブルッフの弦楽五重奏曲の世界初演及び世界初録音を、2012年にはスペイン王室所蔵のストラディヴァリウスによる弦楽五重奏を演奏し、絶賛されました。2022年まで6年間、東京藝術大学長を務められました。

チケットのご予約受付および発売は、8月頃を予定しております。お申し込み・お問い合わせは当館総務課（電話 03-3209-0241）までご連絡ください。

<開催概要>

出演者：HONO Quartet、澤和樹（ヴァイオラ）

日時：2023年10月28日(土) 13時15分開場、14時開演(予定)

会場：東京文化会館 小ホール (JR 上野駅公園口改札から徒歩1分)

料金：4,000円 (全席自由)

曲目：ハイドン：弦楽四重奏曲 ト長調 Op.33-5

モーツァルト：弦楽五重奏曲 ハ長調 K.515 他(予定)

にってんフォーラム〈第127号〉 2023 春

発行 2023年4月25日〈年4回発行〉

発行人 長岡英司

編集人 立花明彦

発行所 社会福祉法人日本点字図書館

〒169-8586 東京都新宿区高田馬場1-23-4

電話03-3209-0241(代) FAX03-3204-5641

URL <https://www.nittento.or.jp/>

*本誌の記事を撮影したり光学的に読み取ったりして、SNS等で発信したりウェブサイトへ転載することを固くお断りします。

ワクワク! ドキドキ!



あなたと映画を観たい。

映画みている!

「スマホで聞く音声ガイド」



NPO メディア・アクセス・サポートセンター

〒151-0061 東京都渋谷区初台 1-51-1

初台センタービル 709号室

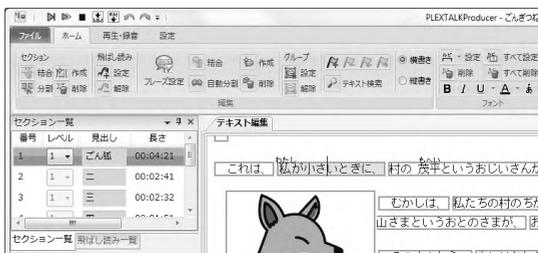
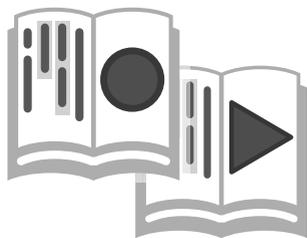
MASC

検索



ホットキヤスタ

音声 / テキスト / マルチメディア DAISY 製作ツール



PLEXTALK Producer

で作れる 新しい DAISY のカタチ

音声DAISY … 録音図書標準方式

- ⊗ テキスト文書から音声合成で図書が作れます
- ⊗ CD書き込み機能で、直ぐに貸し出しできます

テキストDAISY … 音声のない DAISY

- ⊗ データ容量が小さく、受け渡し時間が短縮できます
- ⊗ ルビ振りにも対応し、正しい読みも担保できます

マルチメディアDAISY … 音声とテキストのマルチメディア

- ⊗ ディスレクシアなど合理的配慮の利用対象者が広がります
- ⊗ 既存の音声を使ってマルチメディア化もできます

90日間無料操作体験版は www.plextalk.com からダウンロードできます

サポート OS	Windows 11、Windows 10、Windows 8.1 以降 ※ 各 OS は日本語のみサポート
プロセッサ	Intel Core i3 以上推奨
メモリ	4GB 以上推奨

レイアウトツール 文字化ツール (OCR) でデータ取り込みが楽々！

PLEXTALK Producer 簡単取り込みセット ¥88,000 (税込)

PLEXTALK Producer 単体 ¥49,500 (税込) 簡単取り込みオプション ¥38,500 (税込)

販売元：

シナノケンシ株式会社

〒386-0498
長野県上田市上丸子 1078

製品情報、ご注文はホームページ：

www.plextalk.com

※ Windowsは米国Microsoft Corporationの登録商標です。Intel Coreは米国および/またはその他の国におけるIntel Corporationの商標です。
※ 記載の情報は2022年6月のものです。機能および外観デザインなどは、性能向上その他の理由で、予告なく変更することがあります。PLEXTALK、PLEXTALKロゴはシナノケンシ株式会社の商標です。